

長野県英語教育改善プラン

実施内容

(1) 英語教育の状況を踏まえた目標

① 「CAN-DO リスト」形式で設定した学習到達目標の整備状況

	2019 達成値	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】					
[設定]	100%	100%	調査なし	100%	100%
[公表]	8.6%	50%	調査なし	70%	100%
[達成状況の把握]	23.7%	50%	調査なし	70%	100%
【高校】					
[設定]	100%	100%	調査なし	100%	100%
[公表]	27.9%	50%	調査なし	70%	100%
[達成状況の把握]	33.3%	50%	調査なし	70%	100%

- ・中学校においては、特に「達成状況の把握」の改善を目指す。具体的には、全教員が参加する教育課程研究協議会で、演習や先進的な事例の共有を通して CAN-DO リストとパフォーマンステストとの関連とその効果について体験してもらい、生徒の各技能の達成状況の把握を促進する。そのために、令和2年度3月に新たに県で作成した CAN-DO リスト（例）を全中学校へ送付し、各校での設定・講評・達成状況の把握を促す。また、生徒の達成状況の把握から授業改善にどのように生かしていくかを学校訪問の際に指導主事が具体的に支援するようにしていく。
- ・パフォーマンステストの実施状況によると全中学校のうち 86.2%が実施し、生徒の学習状況の評価をしていることが推測される。一方、この CAN-DO リストとパフォーマンステストが紐付いておらず、達成状況の把握をしていないと回答している学校が多い。教育課程研究協議会で説明し、多くの学校が生徒の状況の見とどけをしていることを確認する。
- ・高校では、全県立高校の教員が集まる教育課程研究協議会において、各校の CAN-DO リスト（5領域版）を持ち寄り、年間指導計画（シラバス）の中に CAN-DO リストをベースにしたパフォーマンステストを設定するなど、CAN-DO リストの改善と活用を行う研修を行い、2022 年までには、公表と達成状況の把握が 100%に到達することを目指す。

②生徒の授業における英語による言語活動時間の割合

	2019 達成値	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】	79.1%	80%	調査なし	90%	100%
【高校】	44.5%	60%	調査なし	70%	80%

- ・中学校では、Small Talk が授業に位置付いたことで達成値が 14.6%の上昇につながったと思われる。今後は、2022 年度の目標に向けて言語活動の質の向上を目指す。例えば、読んだ英文の内容をもとに英語でディスカッションをする活動の演習を各種研修会で扱い、より思考力・判断力・表現力の向上につながる言語活動を促進する。
- ・高校では、「英語指導力アップスキルプロジェクト研修会」等において、言語活動の具体例のワークショップ等を行った取組等が、割合の上昇につながったと考えられる。英語教育実施状況調査の結果について公表し学校同士が現状を比較することで、自校の指導上の課題を明らかにし、授業改善を図る。また、4技能を統合した言語活動の具体例についても紹介をしていく。他県の授業を見学することで、授業改善を図る機会を設定する。

③パフォーマンステストの実施状況

	2018 達成値	2019 達成値	2020 目標値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】					
[スピーキング]	2.69 回	3.10 回	3 回	4 回	5 回
[ライティング]	2.38 回	2.92 回	3 回	4 回	5 回
【高校】					
[スピーキング]	2.69 回	3.10 回	3 回	4 回	5 回
[ライティング]	2.38 回	2.92 回	3 回	4 回	5 回

[スピーキング]	0.6回	1.0回	2回	2回	2回
[ライティング]	1.0回	1.5回	3回	3回	3回

- ・中学校では、2021年度の全面実施に伴い、2022年度までにはパフォーマンステストが位置付くように、定期テスト改善に向けた指導と評価の一体化研修会でスピーキングテストの実例を提示し、普及するようしていく。
- ・高校では、2022年度からの新学習指導要領実施に伴う観点別評価の導入に向け、2021年度は「パフォーマンステスト評価集」（2018年度に県で作成）の活用を促し、具体的な実施方法についての情報提供、研修会を行う。これにより、2022年までに各校でスピーキングテストを年間で2回、ライティングテストを年間で3回実施することを目指す。

④英語担当教員の授業における英語使用状況

	2018 達成値	2019 達成値	2020 目標値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】	67.1%	79.2%	80%	90%	100%
【高校】	41.4%	49.1%	60%	70%	80%

- ・中学校の達成値によると、④「生徒の英語による言語活動時間の割合」とともに、教師の英語使用状況が改善していることが考えられる。2022年度の目標を到達するために、教師も生徒も英語を使って生き生きとやり取りしている授業を公開し、英語を使った授業の動機付けをする。
- ・令和2年度3月に新たに県で作成したCAN-DOリスト(例)に高校の目標を掲載し、生徒が高校進学後に付ける力の見通しをもつことで、より一層授業での英語使用を意識するように促す。また、中学教員も高校の公開授業を参観することで、中高の授業の接続と、教員の英語指導力向上を図る。
- ・高校では「授業を英語で行うことを基本とする」ことの目的や意図を再度周知する。また、「英語指導力アップスキル研修会」や「教育課程研究協議会」等において、小学校や中学校の授業のビデオ視聴や、デモ授業を通して、高校の授業において生徒と英語でやり取りしながら進める授業の具体について学ぶ。

⑤求められる英語力を有する英語担当教員の割合 (CEFR B2 以上)

	2019 達成値	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】	35.4%	40%	調査なし	45%	50%
【高校】	83.9%	84%	調査なし	86%	88%

- ・2022年度までに中学校の目標値である50%に到達するために、約100名がCEFR B2レベル以上の英語力を有する必要がある。英語教員外部試験助成制度を周知したり、各種検定日のスケジュールをチラシにして配布したりして、外部試験の検定受験を広げるようしていく。研修会の際などに、英語を使ってお互いの考えや気持ちを伝え合う機会を設定することで、教員が英語力を高めようとする意欲を喚起する。
- ・高校では、研修会や県主催の教育課程研究協議会などの折に、英語教員外部試験助成制度について周知を図るとともに、大学入学共通テストに係る英語資格・検定試験を、教員が受験するように呼びかけを行った結果、目標値に到達している。現状を継続しながらも、さらに教員が、英語力を高めるよう情報提供をしていく。

⑥求められる英語力を有する生徒の割合

	2019 達成値	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値
【中学校】CEFR A1 相当以上	43.6%	46%	調査なし	48%	50%
【高校】CEFR A2 相当以上	40.9%	43%	調査なし	45%	50%

- ・中学校では、CEFR A1 レベル相当以上を取得している生徒数の割合は上昇傾向にある。言語活動時間の割合が向上しており、生徒が使いながら英語を身に付けるようになっている割合が増加していることが要因として考えられる。令和元年度から実施しているテスト改善を促す研修会を行い、学校における学習評価がCEFR A1 レベル相当以上のものになるよういき、2022年度までに50%という目標を達成するようしていきたい。

- ・高校では、研修協力校での公開授業や「英語指導力アップスキルプロジェクト研修会」等において、生徒が主体的に学び合いながら英語の4技能をバランスよく伸ばすための指導法の研修を行った。この結果、授業での言語活動が改善され、生徒の英語力向上につながったと考えられる。
- ・2020年度から大学入学共通テストが開始され、英語資格・検定試験の導入も検討されていることから、今後も引き続き英語資格・検定試験の積極的な受験を呼びかけていく。
- ・長野県高文連英語専門部や県内の大学との連携を図り、English Camp, スピーチ・レシテーションコンテスト, ディベートコンテストへより多くの中・高生が参加できる仕組みを構築していく。

⑦平成31年度全国学力・学習状況調査の結果から

- ・「聞くこと」においては、多くの生徒が音声を聞く回数が1回であることに慣れていなかったことが推察される。これは、序盤の【大問1 設問(3)】日常的な話題について、情報を正確に聞き取るような部分的な聞き取りができれば答えられる設問が70.2% (全国比 -2.1) であったことに対し、ある程度慣れてきた【大問2】まとまりのある英語を聞いて、話の概要を理解するような設問の正答率が72.7% (全国比 +0.9) であったことから推察して考えられる。
- ・令和元年度に実施したテスト改善研修の際、各中学校が持参したテストを確認したところ、部分的な情報の理解ができていないかどうかを問う問題が多かった。このため、生徒は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて聞いたり読んだりする際、
 - 必要な情報を聞き取ったり、読み取ったりすること
 - 概要を捉えること
 - 要点を捉えること
 といったことを意識せず、英文全体を理解しようとしていると思われる。
- ・「書くこと」においては、特に、一般動詞の2人称単数現在時制の疑問文や1人称複数過去時制の肯定文を正確に書くことが課題である。テスト改善研修の際、各中学校が持参したテストを確認したところ、空欄の語形を機械的に変化させる問題は多く出題されているが、文脈に合わせて語句を補う問題は出題する学校が少ないのが現状である。

[参考] 以下、全国の正答率との比較から課題がある設問

<聞くこと>

【大問1 設問(3)】70.2% (全国比 -2.1)

日常的な話題について、情報を正確に聞き取る。

→外国人の先生と女子生徒の会話を聞いて、その内容を最も適切に表している絵を選ぶ設問

<読むこと>

【大問5 設問(2)】70.5% (全国比 -3.9)

日常的な話題について、簡単な文で書かれたものの内容を、正確に読み取る。

→ある状況を描写する英文を読んで、その内容を最も適切に表している絵を選ぶ設問

【大問5 設問(3)】70.6% (全国比 -2.5)

→月ごとの平均気温を表したグラフを見て、その内容を正しく表している英文を選ぶ設問

【大問7】29.6% (全国比 -3.2)

まとまりのある英語を読んで、説明文の大切な部分を理解する。

→チンパンジーに関する説明文とその前後にある対話を読んで、話の流れを示すスライドとして最も適切なものを選ぶ設問

【大問8】8.2% (全国比 -2.7)

書かれた内容に対して、自分の考えを示すことができるよう、話の内容や書き手の意見などをとらえる。

→食糧問題について書かれた資料を読んで、その問題に対する自分の考えを書く設問

<書くこと>

【大問9 設問(1)①】77.1% (全国比 -2.8)

文の中で適切に接続詞を用いる。

→文中の空所に入れる接続詞として最も適切なもの (if) を選ぶ設問

【大問9 設問(1)②】 55.4% (全国比 -2.8)

→文中の空所に入れる接続詞として最も適切なもの (because) を選ぶ設問

【大問9 設問(1)①】 71.6% (全国比 -2.0)

一般動詞の2人称単数現在時制の疑問文や1人称複数過去時制の肯定文を正確に書く。

→与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語(Do you)を補ったりなどして、
会話が成り立つように英文を書く設問

【大問9 設問(1)②】 21.5% (全国比 -7.4)

→与えられた英語を適切な形に変えたり(stayed)、不足している語(We)を補ったりなど
して、会話が成り立つように英文を書く設問

【大問9 設問(3)②】 29.0% (全国比 -3.9)

与えられた情報に基づいて、3人称単数現在時制の肯定文や否定文を正確に書く。

→与えられた情報に基づいて、ある女性が住んでいる場所を説明する英文を書く設問

【大問9 設問(3)③】 33.7% (全国比 -3.7)

与えられた情報に基づいて、ある女性がペットを飼っていないことを説明する英文を書く設問
<話すこと>

特例措置がとられた参考値のため、公表がされていない。

- ・上記の課題を改善すべく、授業改善とテスト改善による指導と評価の一体化に向けた学習評価の研修会を実施する。このことにより、現状からの課題を解決し、改善に向かうようにしていく。

【小学校】

学習到達目標の整備状況

【小学校】	2019 達成値	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値
[設定]	(設定なし)	50%	調査なし	50%	75%
[公表]	(設定なし)	30%	調査なし	30%	40%
[達成状況の把握]	(設定なし)	50%	—	50%	75%

- ・全面実施に向けて2019年度にCAN-DO リストのモデルを、2020年度に改訂版を配布した。CAN-DO リストの設定と達成状況の把握が円滑にされるように各種研修会や教育課程研究協議会で活用を促すようにし、2022年度の目標に到達するようにしていく。

【小学校専科】

小学校教員の新規採用者に占める一定の英語力を有する者の割合

	2020 目標値	2020 達成値	2021 目標値	2022 目標値	2023 目標値	2024 目標値	2025 目標値
割合	15%	21%	26%	32%	38%	44%	50%

- ・2020年度の採用から、小学校教員の新規採用において、中学校又は高等学校英語の免許状を有する者に対して加点する制度の導入を始めた。これにより、2025年度まで一定の英語力を有する教員の採用を促進していく。
- ・また、免許法認定講習を行うことにより、将来的に採用試験を受験する可能性がある教員の中学校二種英語免許の取得を促している。(2020年度の信州大学免許法認定講習においては23人の講師が受講)

(2) (1) の目標を達成するための取組 (施策の全体像と具体的な計画)

教員の資質・能力の育成に向けて、小学校、中学校、高等学校の教員を対象とした研修を実施する。研修の一部を大学など外部機関との連携により行うこととし、教員の英語力・指導力の専門性向上を目指す。また、英語教育推進リーダーを中心に授業公開を設定し、授業を通し

た具体の姿で県内各校に実践が広がるようにする。2020年度に新型コロナウイルス感染症の拡大予防を目的にオンラインによる研修会を実施し、アンケートをとった。アンケート結果から、多くの教員が「移動に時間がかからないため、自習措置の時間が少なくなりよい」「オンラインでも対面に近い研修ができる」などの声が自由記述で見られたことから、オンライン研修の設定回数を多くする。研修の評価については、研修後の質問紙調査によるものとする。質問紙調査の回収後、その結果を検証し、2022年度までの研修の内容や研修時期、回数等を新たに設定し直すものとする。

【小学校】

○ 小学校英語授業公開

- ・英語教育推進リーダーが中心となり、2019年度に県で作成した小学校外国語教育ガイドブックの内容を具現化した授業を2022年度まで公開する。CAN-DOリストによる目標の児童との共有や達成状況の把握をしている場面を、具体的に授業を通して県内に普及するようにしていく。授業実践を指導主事が支援する。新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、感染状況に鑑み、オンラインによる授業公開、授業研究会とする。

○ 教科書活用研修会

- ・令和2年度から新しく使用されている教科書を活用した授業ができるように、大学教授（信州大学 酒井 英樹 教授）や英語教育推進リーダー等を講師とした研修会を実施。2022年度まで実施し、教科書を活用した言語活動やCAN-DOリストによる目標の児童との共有や達成状況の把握を学習評価へのつなげていく方法などを紹介し、普及を目指す。オンラインで研修会を実施し、広域である長野県のどの地区の教員も参加しやすい研修会を目指す。

○ 英語専科教員研修

- ・県内に配置される専科教員を対象に研修を実施する。大学教授（信州大学 酒井 英樹 教授）を講師とし、小学校外国語教育の特性を生かした授業づくりと、児童の実態に合った授業づくりをするように研修を行う。また、高学年用の教科書が初めて使用されることから、ワークシートや教材の共有を促し、現場での実践に活用できるリソースと専科教員同士のネットワークの構築を目指す。

○ 免許法認定講習（英語）

- ・信州大学と連携し、2020年度は2019年度からの受講生48人が継続して受講した。受講生のうち、44人が免許申請に必要な単位を取得した。
- ・2022年度まで継続して講習を行い、小学校教員の英語指導力の向上を目指す。また、講師も対象としていることから将来的に採用試験を受験する可能性がある教員の中学校二種英語免許の取得を促す。

【中学校】

○ 中学校英語授業公開

- ・英語教育推進リーダー等が、言語活動の充実を目指した実践研究を行い、その成果としての授業を公開する。授業は英語で行うこととし、教師の英語使用状況向上を目指すモデル授業とする。指導主事が指導・助言を行い、事前の授業から支援する。
- ・高校教員も公開授業に参加し、中学の授業を参観することで、生徒と英語でやり取りをしながら授業を進める具体的な指導方法について中高教員が共に研修を行う機会とする。
- ・これらの取組を、2022年度まで継続して実施し、授業実践が県内に普及されるようにしていく。

- 学習評価に関する研修会
 - ・教員が新しい学習評価の着実な実施ができるように、各領域の「知識・技能」や「思考・判断・表現」を適切に測る定期テスト改善（パフォーマンステスト含む）の促進を目指す。
 - ・パフォーマンステストと CAN-DO リストとの関連について扱い、生徒の達成状況の把握から授業改善につながった事例を提示する。
 - ・大学教授や英語教育推進リーダーが中心となり、定期テストの改善とそれに伴う言語活動の事例を提供する。
 - ・市町村教育委員会の要請により、指導主事が出向いて行う学習評価の講習を行う。
 - ・全国学力・学習状況調査の問題や、国立教育政策研究所が作成した資料のテスト事例、2019年度に県で作成した「中学校テスト改善ハンドブック」を活用しながら2022年度まで実施していく。
 - ・高校教員も研修会に参加できる仕組みを作り、中学校の事例を通して観点別評価の仕方を中高の教員が共に学ぶ機会とする。

- CAN-DO リストの整備
 - ・新学習指導要領の全面実施に向けて、国が指標としている CEFR A1 上位（英検3級相当）をゴールとした学年別の CAN-DO リストを作成し、現在県がモデルとして公開している CAN-DO リストを更新する。CAN-DO リストの設定や生徒の達成状況の把握の改善を促す。

【高 校】

- 英語指導力アップスキルプロジェクト研修会（6回開催）
 - (1) 公開授業，研究会（4回）
 - 研修協力校を募り，公開授業，研究会を開き各校への普及を図る。その際英語教育推進リーダーも活用する。
 - 設定するテーマの例
 - ①英語を使った探究的な学習の実践
 - ②ディベート，プレゼンテーション等の言語活動の充実
 - ③小・中学校との連携について研究を行い，モデル授業案を開発
 - ④4技能をバランスよく身に付けるための指導法の改善・授業内容の充実を図る。
 - ⑤主体的・対話的で深い学びを実現する授業
 - ⑥パフォーマンステストの実際
 - (2) 外部講師による研修（1回）
 - 大学等の外部講師を招聘し，英語教育の今日的な課題について学ぶワークショップや講演会を実施。「生徒の統合的な言語活動の充実」をテーマに，①教員の指導力向上，②生徒の統合的な言語活動の実践事例研修，③受験指導と言語活動，④パフォーマンステストの観点から研修を行う。
 - (3) 他県視察研修（1回）
 - 希望者を募り，改善が進んでいる他県の高校で実際に授業を見学し，情報交換する機会を提供する。研修の内容は通信等で他校に発信する。
 - (4) 情報提供
 - 「アップスキル通信」を発行し，研修内容や英語教育の動向について全公立高校に配信する。
 - ・小中学校教員も研修協力校での公開授業に参加できる仕組みを作り，高校での授業改善の取組について学ぶとともに，小中高の指導の接続をより円滑にするための情報交換を行う。
- 学校訪問
 - 研修や情報提供のみでは，届く範囲が限られているため，研修指導の機会等を利用してなるべく多くの学校を訪問し，指導法改善，パフォーマンステストの実施について認識の共有を図っていく。また，CAN-DO リストや年間指導計画も点検し，改善に繋げるための支援を

行う。

○ 授業動画ライブラリの作成

「英語で教える授業」「主体的・対話的で深い学びを実現する授業」「活発に言語活動が行われている授業」「パフォーマンステスト」などの動画を撮影し、まなびすけ信州（教員向けポータルサイト）に公開する。

○ 長野県英語教育フォーラム

- ・全校種の外国語及び英語担当教員を対象として、研修協力校の研究成果を広く県内に普及するために、年1回開催する。小学校・中学校・高等学校を貫くテーマとして「言語活動の充実」をテーマに、研修協力校の教員が、CAN-DOリストを活用した授業や評価の改善に関する実践事例を発表する。また、大学の教員等も交えてパネルディスカッションを行い、県内に校種間接続を促進していく。アンケート調査で事業の評価を行い、次年度以降への改善へとつなげていく。

(3) (2) を実施する体制の概要

長野県の小学校・中学校・高等学校が連携し合い、児童生徒の英語力が高まっていくように、以下のような体制で授業公開や研修の実施、資料提供を行うこととする。



